

「大人の嗜み 立花・鉄砲・古画鑑賞」展によせて 「花車図屏風」と「立花図屏風」

本展では、新春にふさわしいあでやかな屏風二点をお借りして展示します。「花車図屏風」(真正極楽寺〔真如堂〕蔵)【図1】と「立花図屏風」(華道家元池坊総務所蔵)【表紙】です(左の「展観のお知らせ」にそれぞれの左隻の全図を掲載しました)。

盛りだくさんの花をいけた籠や箱を積む3台の車を描く「花車図屏風」は、背景を金一色にする豪華な総金地屏風です。同主題の絵画に、1634年に造営された名古屋城上洛殿一之間の廊下の杉戸絵があります。廊下を遮断する杉戸の表裏に、花車図と花桶図を描くのですが、筆者は狩野探幽(1602~74)とその一門です。それに対して、この「花車図屏風」に落款はありませんが、おそらく同時期の狩野派作品でしょう。花を積み上げた車の装飾は、名古屋城杉戸絵のそれよりも、はるかに豪華で精緻なものになっています。

花車と立花の関係を示すのが、1600年代末に刊行された『立花訓蒙図彙』という花書(立花図集)です。そこには、「秋花」として、秋草をいけた桶を乗せた車が描かれています【図2】。真偽のほどは不明ですが、「鳥丸光広公の御物好にて」、花車を大名家の広い床の間に飾った時の記録だという解説も添えられています。簡略な挿絵ですが、車には蒔絵が施されていることや、車輪の直径は50cmほどで車全体の長さは160cmあまりである、と寸法も記されています。

同書には、ほかに「汐汲車」と呼ばれる花も収録されています。

その挿絵には、撫子をいけた汐汲みの桶を、簡素な四輪車に乗せて、掛軸をかけた床の間に飾ってある様子を見ることが出来ます。掛軸には「冬まで残るやまとめでしこ」と書き付けてあり、掛軸の内容と立花とがつながる趣向は、後述する「立花図屏風」に似ています。

ともあれ、江戸時代前期に、このように、花を乗せた車が立花の一つの型として認められていたようです。

しかし、そもそも花車は、いつごろ、だれが、考えたものなのか、わかっていません。一説には、唐の時代に、権勢を振った楊貴妃の親族が、どこでも花を楽しめるように、花を積んだ台車を行く先々に引いていったという「移春檻」の故事にちなむともいわれています。たしかに、江戸時代中期の絵画には、唐子が花車を引いて遊ぶ光景がよく描かれています。1740年代に刊行された橋守国の『絵本直指宝』には、「唐子遊の図」として数種類の唐子遊戯図が収録されていますが、そのひとつに花車を引く遊びがあり、五人の唐子が花をいけた籠を積んだ台車を引いています【図3】。同書には、それぞれの遊戯の由来を記す解説文もついているのですが、残念ながら花車を引く図には、「小児花車の遊び」としか記されていません。しかし、唐子の遊具とされているのは、花車は本来中国のものと考えられていたからでしょう。

いっぽう、各地の祭礼行列に、花車を仕立てて、それを引いて練

り歩く人々の姿を見ることが出来ます。たとえば、1700年代に描かれた「稻荷祭絵巻」(国立歴史民俗博物館蔵)には、数人の女性たちが花車を引いている様子がとらえられています【図4】。こちらには、中国的要素はありません。むしろ、海水を入れた桶を車に乗せて引く、ひなびた汐汲み女、たとえば謡曲『松風』の女たちのイメージと重なります。

このように、典拠不明ながら、屏風絵から立花、祭礼行列、さらには工芸や染織の意匠というように、花車は、江戸時代の文化にしっかりと根をおろしていました。

つづいて、「立花図屏風」(華道家元池坊総務所蔵)をご紹介します。この屏風では、12種の立花と、その後の床の間の12点の絵画との組み合わせの妙をお楽しみください。

床の間の絵画といいましたが、正しくは床の間の壁に描かれた壁貼付絵と、壁に掛けられた掛軸の絵とがあります。全部水墨画で、壁貼付絵は雲龍図と山水図がそれぞれ3点、掛軸のほうは鳩図、柳に野馬図、瓜に鼠図、猿図、高士図、寒山拾得図です。そして、壁貼付絵の山水図の岩をかたどる強い調子の輪郭線は、探幽以後の江戸の狩野派風です。いっぽう、掛軸のほうは、古い中国絵画を思わせる主題で統一されています。どうやら、大名家や古寺が護り伝えてきた高価な「唐絵(中国絵画)」を再現しているようです。ここに、本展のテーマの、立花と古画鑑賞とが結びつきます。

雲龍図が描かれた床には、平たい花器に岩を立てて、松や梅を添えてあります【表紙】。雲龍の前景として岩山を表わしているようです。また掛軸の絵のなかの鳩が、その前に置かれた立花の松の枝にとまっているようにみせるトリッキーな仕掛けも施されています。掛軸が、定規を使って描いたような長方形で表されるのは、17世紀前半の邸内遊楽図屏風以来の型どりの描法です。

機知に富んだ小粋な屏風ですが、作者は不明です。画面に「春」印が捺されていますが、残念ながらその絵師を特定できません。しかし、江戸狩野風の描法を身につけ、「唐絵」の知識を持ち合わせていることなどから、17世紀末ごろの狩野派系の絵師の作品と推測します。

新春のひとつき、ふたつの華やかな屏風絵をはじめとする、往時の優雅な大人の嗜みにまつわる作品の数々を、どうぞ、ゆつたりとお楽しみください。(泉万里)

図版出典

図2『花道古書集成』2 思文閣 1970年複製

図3早稲田大学図書館古典籍データベース

https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko31/bunko31_e0459/index.html

図4狩野博幸、山路興造、藤井健三『近世祭礼・月次風俗絵巻』東方出版 2005年

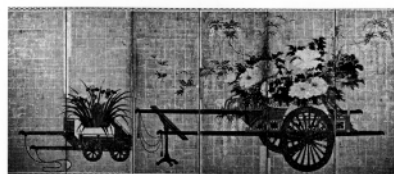


図1



図2



図3



図4

季刊 美のたより No.213

令和2年12月26日

発行 大和文華館